

論文の和文要旨

論文題目

第二言語習得における
作文教育の意義と特殊性

氏名

石毛順子

本論文の目的と構成

現在日本語教育においても、言語学や教育学だけではなく、心理学的な観点から研究を行うことが見られる。その心理学的な観点から研究を行うなかで、認知発達心理学における人間の認識発達に影響を及ぼす文化的側面を重視した、社会文化的アプローチによる研究が見られるようになってきている。この社会文化的アプローチはソビエトの心理学者ヴィゴツキーに端を発するアプローチである。

本研究は第二言語の作文活動を心理学的な観点から捉え、日本語教育の現場に即した提案を行っていかうとするものである。したがって、本研究は、第二言語の作文の発達に最近接領域に適応した媒体を今後考察していくため、学習者の作文の実態を明らかにすることを1つ目の目的とした。そして、作文の発達を促す媒体を探ることをもう1つの目的とした。

まず1章から3章にかけて、本研究で行った調査を考察する根拠となる理論を述べた。1章ではヴィゴツキーの媒介理論について述べ、作文の基本となる書くための言葉の特性を探った後、媒体の1つと考えられる下書きに言及し、さらに作文教育について概観した。2章では、第二言語習得の観点から、作文教育の意義と第一言語使用について述べた。3章では、作文学習を促進するための動機づけの理論を概観した上で、ヴィゴツキーの発達に最近接発達領域理論を述べ、指導のあり方について考えた。4章では本研究の目的について述べた。次に、5章から9章では調査について述べた

が、調査は第二言語の作文活動の実態を捉えるものと、第二言語の作文活動で用いることのできる媒体の提案の手がかりを探るものからなっていた。5章では、第二言語の作文の発達のあるようを調査した。6章では、学習者の作文学習への動機づけについて探った。7章では、第二言語の作文過程において、学習者がどのような活動を行っているのか観察した。8章と9章では、第二言語の作文に寄与できる媒体を探るべく、下書きと第一言語を取り上げた。最後に、10章において本研究の結果をまとめ、1章から3章で述べた理論に基づき、全体の総括を行った。

第1章「書くこと」とは

まず、書くことを研究する上での基となる理論を概観した。ヴィゴツキーの理論は、主体-対象という二者関係ではなく、主体-媒体-対象という三者関係を最小の単位として人間の活動を理解するべきであるというものであった。そして、書くための言葉の特性を見てみると、話すための言葉との相違点が明らかになった。なかでも、書く過程においては、即時性の求められる「話すこと」とは異なり、「書くこと」は行きつ戻りつができ、準備と推敲が重んじられる活動であることが明らかとなった。そして、書く過程で用いられる下書きを、過程をスムーズにするだけではなく、作文活動とその結果である作文自体を変革する作用のある媒体であることを示唆した。以上を踏まえ、日本と各国の第一言語での作文の教育の状況について述べた。

第2章 第二言語の学習における作文と転移

まず、第二言語で作文を学ぶ意義を検討した。第二言語を学ぶことによって第一言語を対象化することができ、さらに第一言語の力を高めるということができることや、書くことは他の技能領域における学習を強化する上で重要であるということが、第二言語で作文を学ぶことの意義としてあげられた。その上で、第二言語と第一言語との関係を転移の観点から探った。

第3章 第二言語の作文学習に対する動機づけと教育

まず、第二言語の作文の学習に取り組み、そして継続させるためには、書くことへの動機づけが必要であるため、動機づけについて概観した。その結果、有能感が学習者の言語学習に大きく影響することが示唆され、また媒体と動機づけも関連があることが示唆された。その上でヴィゴツキーの発達の最近接領域の理論を取り上げ、教育の在り方を吟味した。

第4章 本研究の目的

先行研究から得られた示唆を基に、本研究の目的を設定した。

第5章 第二言語の作文における質的側面の発達

第二言語の学習初期から中期にかけて、作文の質において何が発達し、また発達しないのかを検討した。分析の対象となったのは、韓国語を母語とする初級中期群の学習者 27 名の作文、中級移行期の学習者 26 名の作文、中級中期の学習者 21 名の作文であった。質は内容・構成・言語形式の 3 つのカテゴリーの観点から分析を行った。その結果、学習者の初期から中期にかけての作文の評点は構成や言語形式に関する項目においては上昇するが、内容に関して上昇する項目は少なかった。

第6章 第二言語の作文に対する学習者の意識

第二言語の作文学習に対する学習者の意識を明らかにし、学習者のレベルが上がるにつれ変化するか検討した。分析の対象となったのは、韓国語を母語とする初級の学習者 17 名、中級の学習者 20 名、上級の学習者 18 名であった。自由記述で回答を求めた結果、「作文を書きたいのはどんな時か」という質問に対する回答に関しては「書く内容が思いつく時」「他の 3 技能と違った、書く技能の特性を使う時」「第二言語で作文を学習していく上での喜び・満足感が感じられた時」というカテゴリーが抽出され、「第二言語で作文を学習していく上での喜び・満足感が感じられた時」が上級では多く観察された。「作文を書きたくないのはどんな時か」という質問に対する回答に関しては「自分の考えを日本語で表すことに困難を感じた時」「望まないテーマについて書かなければならない時」「書くテーマ・内容が思いつかない時」「書くことが義務で、制約がある時」「作文に集中できない時」の 5 カテゴリーが抽出され、学習者のレベルによる違いは見られなかった。つまり、「作文が書きたくない時」に対する意識は学習者のレベルがあがっても変化が見られないということが示唆された。

第7章 第二言語の作文過程

作文を書き上げるまでの活動を学習者のレベルと作文の質の成績の観点から検討した。分析の対象となったのは、韓国語を母語とする初級の学習者 2 名、中級の学習者 2 名、上級の学習者 2 名であった。Think-aloud 法によりデータを収集し、チェックリストを用いて行動の頻度を算出した。その結果、上級と全ての成績上位群で多く見られた活動は、辞書使用に代表される、外部リソースによる助けであった。しかし、内容成績上位群・構成成績上位群で多く見られた草稿を読むという活動は、上級で多く見られなかった。また、作文を書き上げるまでの思考において、第一言語と第二言語をどのように使用しているのか、学習者のレベルと作文の成績の観点から検討した。その結果、初級において第一言語使用が多く観察されたが、成績下位群では言語形式成績下位群のみで第一言語が多く観察され、内容成績下位群と構成成績下位群では第一言語は多く観察されなかった。他に第一言語が多く観察されたのは、内容成績

中位群であった。以上の結果から、作文を書き上げるまでの学習者の活動と第一言語の使用状況は、学習者のレベルの視点と作文の成績の視点では異なるということが明らかとなった。また、作文の準備に当たる「草稿を読む」「計画」が見られ、作文の推敲に当たる「編集」「文・文の一部を読み返す」が観察されたことから、第1章で述べた、作文は行きつ戻りつのできる活動であるということが裏付けられた。さらに、「草稿を読む」が内容上位群と構成上位群で多く観察されたこと、「計画」「編集」「文・文の一部を読み返す」がどの成績上位群でも少ないということがなかったことから、行きつ戻りつは作文が上手になっただけからなくなるというわけではないということが示唆された。

第8章 第二言語の作文過程における下書き

学習者が下書きを用いているのか、そしてどのような下書きが特徴的に見られるのか、という点について検討した。分析の対象となったのは、韓国語を母語とする初級中期群の学習者 27 名、中級移行期の学習者 26 名、中級中期の学習者 21 名であった。その結果、ほとんどの学習者が下書きを書いてはいたが、レベルが上がっても下書きを使用しない者もいた。そして、特徴的な下書きとして3つのタイプが抽出された。1つ目は、作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているタイプであった。初級から中級にあがるにつれ使用者が増えていたものの、このようなタイプを使用するものは非常に少なかった。2つ目は、文字や語彙の確認のみが行われているタイプであった。人数は少ないが、レベルによって使用する学習者の割合は変化していなかった。3つ目は、原稿用紙に書かれた作文とほとんど同一の作文が書かれているタイプであった。初級から中級にあがるにつれ使用者が減っていたが、一番多くの学習者が利用していた。

第9章 第二言語の作文に第一言語の下書きが及ぼす影響

第二言語の作文の下書きにおける第一言語使用の影響について検討した。分析の対象となったのは、韓国語を母語とする初級の学習者 17 名、中級の学習者 20 名、上級の学習者 18 名であった。それぞれの学習者が第一言語で下書きをしてから書いた第二言語の作文と、第一言語で下書きをせずに書いた第二言語の作文の質の成績を比較した。まず、第一言語を使用しない時より第一言語を使用した時の方が成績の悪いという項目は見られず、質に関わる成績の観点からは、第一言語使用による作文への悪い影響は伺えなかった。逆に、第一言語を使用しない時より第一言語を使用した時の方が成績のよい項目が見られ、その項目は構成の下位項目である「論理的つながり」であった。

第10章 本研究の結論と意義

まず、本研究で得られた知見をまとめ、得られた知見を1章から3章で検討した理論の面から検討を行った。そして本研究に残された課題について述べた。検討の結果、書くことの目標は、最後まで止まらずにすらすらと書けるということではなく、書くことの特性である「行きつ戻りつできる」ということを理解し、その過程の中で表された言葉を対象化して眺め、思考の抽象化と再認識を進めていくということであるということが示唆された。そして、第二言語で作文を学ぶ意義は、第一言語での作文の能力を高め、第一言語での抽象化と思考の再認識をより深められることにあると考えられた。次に、学習者が書くという活動に取り組むためには、有能感が大きな意味を持ち、有能感を持たせるための媒体の検討が必要であることが示唆された。また、書くことの特性を理解して、進んで「書く」ということを選択できるような指導が必要であることが示唆された。それから、作文学習において有効に機能する媒体として、下書きと第一言語が提案された。最後に、本研究に残された課題として、対象とする学習者の多様性と、様々な媒体の可能性について述べた。